現地だより

～クウェート紹介～

㈱オリエンタルコンサルタンツグローバル
道路技術部次長　**村岡　正一**

はじめに

その日は晴天の良い天気。日本からはるか8,300キロメートル余り離れたクウェート空港に到着したのは2008年５月初めのことでした。ついに、来てはいけなかった（!?）禁断の地へ降り立ってしまったのです。ここは敬虔なイスラム教徒の多い国で、宗教上、厳しい戒律があります。何と言っても、「ハラム」と呼ばれる禁じられているものがあり、食べ物では、アルコールや豚肉などが対象となっています。それまでは、私のような外国人は対象にはならないだろうと思っていたのですが、クウェートではこれらを買うことや持ち込むことができません。この時から、大好きなビールとカツ丼を我慢した生活をしなければなりませんでした。その絶望感は今でもよく覚えています。

この現地だよりでは、私がクウェートで携わってきた仕事や生活において感じてきたことを、少々自分勝手な考えで、お伝えさせていただきます。世間話のネタにでもなったら幸いです。

クウェートの一般情報

そもそも、それまで、クウェートについての知識は全くなく、名前すら初めて聞いた国でした。まずは、クウェートの一般事情を以下にまとめました。

－地理：クウェートはアラビア湾（ペルシャ湾）の一番奥に位置し、四国と同じくらいの面積。北から西はイラクに、南はサウジアラビアと接している。

－人口：約490万人。内クウェート人は160万人程度。エジプト、インド、バングラデシュ、パキスタン、フィリピンなどからの出稼ぎ労働者が残り人口の70％を占め、日本人はわずか150人前後。

－気候：夏（６～９月頃）は気温40～45℃、湿度10％程度で、焼却炉の前にいるような体感。年に２～３日は50℃を超える。冬（12～２月頃）は10～20℃で、朝晩はさらに冷え込むことがある。季節の変わり目には、視界数十メートルになるサンドストーム（砂嵐）が、度々発生する。近年は異常気象のせいか、あまり見かけなくなった。

－通貨：クウェーティ・ディナール（KWD）。１KWD＝500円前後。

－歴史：クウェートは1961年６月に英国から独立。同年12月に日本との国交が樹立され、2021年に60周年を迎えた。

－観光名所や娯楽：あまりたくさんない。

・ファイラカ島：クウェート市から20キロメートルほど離れたアラビア湾に浮かぶ島。古代ギリシャ文化が確認されているということで、文化観光地として開発が行われている。湾岸戦争時にはイラク軍の拠点となった。

・大型ショッピングモール：高級ブランド店の入ったショッピングモールがいくつもあり、日本の無印良品やダイソーが入ったモールや、長さが１キロメートルにも及ぶ超大型モールもある。

・クウェートタワー：アラビア湾岸道路沿いに立っているユニークな形状のタワー。だんごをくし刺しにしたような塔が２基建っており、そのだんご部分は貯水施設となっている（約4,500立方メートルの貯水能力、高さ187メートル、1979年完成）。クウェートには河川も湖沼も無く、年間降水量も100ミリ程度で、水利用のほとんどを海水淡水化に頼っており、あちこちにキノコ型の貯水塔が見られる。

筆者紹介
1983年　パシコン技術管理入社
2003年　パシフィックコンサルタンツインターナショナル転籍
2008年　オリエンタルコンサルタンツ転籍
2014年　オリエンタルコンサルタンツグローバル転籍
フィリピン、インドネシア、スリランカ、ソロモン諸島などの道路計画、設計、構造物計画、施工監理に従事し、2008年からはクウェート駐在

・コーズウェイ・ブリッジ：クウェート湾には、対岸との間を結ぶ総延長48.5キロメートルの海上橋梁がある。2019年に完成し、途中２か所の人工島にはパーキングエリアやキャンピングエリアが設けられており、週末には混み合う。
・ラクダレース：ラクダのみがトラックを走り順位を競い合うもの。賭博もハラムになるため、観客はこれを純粋に見て楽しむ。
・砂漠のキャンプ場：冬になると砂漠でのキャンプが解禁となり、週末は家族や友人同士でバーベキューをしたり、４輪駆動車で乗り回したりといった楽しみ方がある。

クウェート・タワー　筆者撮影

貯水塔　筆者撮影

ぜいたくな設計条件

私は、建設コンサルタントの一員として、クウェートへやって来たのですが、主要幹線道路の設計（既設道路のアップグレードや新しい道路建設）と工事監理のプロジェクトを行ってきました。

オイルマネーで潤っているクウェートにとっては、至って普通なのでしょう…上り下りの合計６～８車線の道路設計・施工という内容のものでした。路肩を含めた道路総幅は実に40メートル程度にもなります。そ

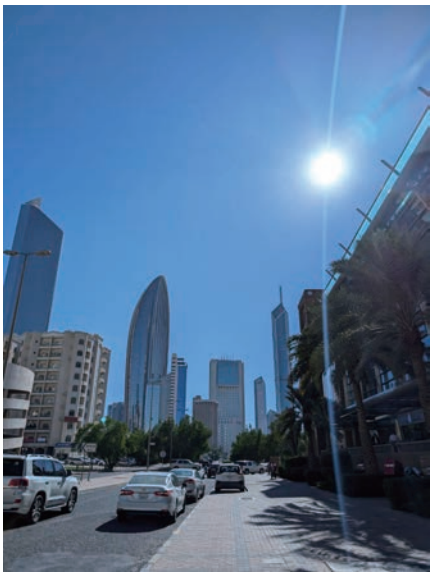
れまで私が係わって来た仕事は、東南アジアの開発途上国が中心で、上下２車線の道路建設ばかりでしたので、これら設計条件は、ぜいたくだと思いました。

また、契約書には、最先端の技術を駆使することや橋梁などの構造物は見た目の良い景観性を重要視した設計を行うことが必要条件で、さらに経済性を配慮することが求められました。

サービスユーティリティ

プロジェクトのエリア内には、水道、電気、通信ケーブル、ガス、オイルなどのサービスユーティリティ（インフラ）が煩雑で不規則に設置されています。私たちの設計では、これらの移設や防護計画が重要な課題でした。この中で、興味深いと感じたのは、道路脇や中央分離帯にある植栽への給水パイプの敷設計画でした。植物に対しても人間と同様に海水を淡水化した水を供給していることには感心しました。それでも、夏の酷暑に負けて、枯れてしまう草木をみると残念な思いが残りました。

クウェート市内のビル１　筆者撮影



クウェート市内のビル２　筆者撮影

現地での筆者

今後のプロジェクトの動向予想

私たちが担当した工事監理は、2013年～16年頃に集中して開始されたのですが、それ以降は途絶えてしまっています。コロナ禍や政治の不安定さ、さらに５～６年前より始まった「クウェータイゼーション」という、主にクウェート人の雇用増進政策も影響しています。これらによって、事務処理全般が遅れていましたが、2024年中頃より回復に向かい始めて来ましたので、これまで動きのなかったプロジェクトも、今年からは活発になるものと期待しています。

クウェートで生活して

冒頭で述べたとおり、アルコールと豚肉はハラムですので、当初は禁断症状気味でした。一時帰国の際に、機内や乗り継ぎの空港で飲んだウィスキーが、口から食道を伝わって胃袋に到達していく感触は、今でも体が覚えています。そして、帰国するたびに、それまで飲めなかった分をばん回するごとく、相当量のアルコールを飲んでいました。

また喫煙者だった私は、クウェートに来てからたばこの本数が増え、さらに、このころから甘い食べ物（チョコレート）に手を出すようになりました。それからは、年齢を重ねるごとに一歩一歩、生活習慣病予備軍の仲間入りをしたのです。たばこは、６年ほど前に卒業できたのですが、チョコレートは継続中で、今では、前から見た体幅より、横幅の方が大きい体型になっています。

クウェートでは、外国人が多いので、多種多様な食べ物を楽しむことができます。ラムやマトンを使ったアラブ料理、インドやパキスタンの各種カレー、フィリピン料理の鉄板焼きや骨付き牛を煮込んだスープ等々、食べ物の誘惑は多いのです。スーパーマーケットへ行くと、世界中からの食材を得ることができ、見るだけでも楽しい気分になります。当初は外食ばかりの食生活でしたが、だんだんと飽きてしまい、経済的にも厳しくなったので、今では自炊中心で自己流に料理を楽しんでいます。料理には何時間もかけることがある一方、食べる時間はわずか数分ということもあり、自分の不器用さに笑ってしまいます。

来たばかりの時は、こちらの民族衣装となっているディシュダシャ（Dishdasha）やヒジャブ（Hijab）姿のクウェート人を見るたびに、なぜか緊張感が生じたのですが、最近では、日本から戻って来た時、その姿を見るとホッとするようになりました。人生の４分の１以上もクウェートで過ごしており、どうやらここでの習慣に慣れ親しんだようで、これからも駐在が続けて行かれそうです。

＃　＃　＃